

新しい生産技術の導入による いちごの生産額向上

活動期間：R1～3

対象：葦王地区いちご部会13戸



この課題で取り組むこと

いちごの産出額を向上させる

①新しい技術で生産性上げる

②高齢化する産地の維持発展

管内他地域、他品目へ波及させる

「いちごは特に重要な品目で・・・」

みやぎ園芸特産振興戦略プラン

	H30	目標R7
産出額	56億円	93億円
作付面積	124ha	166ha

ちなみに野菜全体の産出額目標
333億円 → 500億円 (150%)

大河原圏域産地戦略プラン

	H30	目標R7
産出額	1.95億円	2.81億円
作付面積	5.4ha	6.5ha



対象いちご部会の課題

〔管内園芸部門全体の課題
宮城県全体の課題〕

**高齢化 産地の維持が先ず必要
そしていかに発展させるか**

蔵王いちご部会 ピーク時 平成14年 23名 J A 共販金額 96,720千円

平成27年～ 現在のメンバー13名 H27～30平均 67,760千円
平均年齢66歳！！ (H30 67,117千円)

R1 (H31) 86,651千円 (前年対比128%)

昨年度から今年も頑張ったが R2 85,236千円 (前年対比98%)

要因は・・・4月、5月の価格の低迷。(パック平均単価10円安)

5月の高温期による過熟果の発生(5月で収穫の終了)

その他・・・近年、直売所や量販店への直接販売が始まる。

近年
先進的施設の建設や設備の導入



先端技術の導入

- ・環境制御
 - ・IPM
- ・・・生産性向上している

収量UPのヒント

管内の従来型施設、栽培方法
高齢等々 高額な投資は難しいが…



先進技術の応用

管内産地の現状に見合った 機器整備、技術導入

- ・低コスト
- ・技術の簡略化
- ・小規模だからこそできることもある

前年度まで導入した技術
例えば

7人取り組み



簡易的な測定器を用い
正確な数値を把握して

11人



適切なCO2施用、温湿度管理

収量向上効果大



3人




反射式ストーブでも
十分効果ある


施設内の光を多くして
光合成促進 白マルチ

収量向上 + 省力化、軽労化で産地寿命を延ばす

計画前 前作 今年これから
2人 → 3人 → 4人予定





不耕起栽培（終了後畝を崩さず毎年使う）
重労働のほ場準備、畝上げ作業を省力化す



天敵カブリダニによるハダニ防除技術
普及しつつある → 技術精度を上げる


全員で取り組み

UVbライトによる
うどんこ病防除

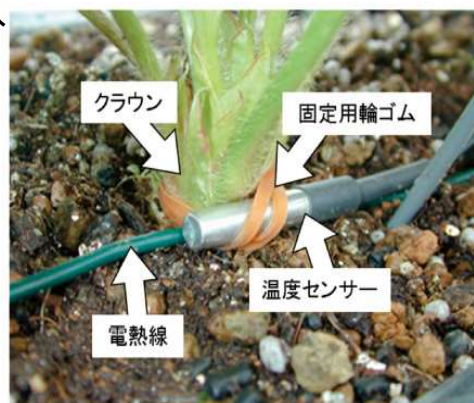
必要に応じて導入 50~60万円/10a

試験的に1人



R2年産栽培での取り組み事項

- 前作（H31年産栽培）取り組んだ技術の精度を上げる **継続**
個別の習熟度に応じ
- 日射量をもとにした灌水量の適正化 **新技術導入**
- 電熱線を利用した株元局所加温 実証圃設置 **新技術導入**
(一般に先進施設では温湯管を利用)
- 一部 高設栽培が増設、導入される **維持発展**
不耕起栽培取り組みが増える
- 老老後継者？ 個別重点にfollow **維持発展**
- UV-Bライト導入による効果の確認 **新技術導入**



課題における成果(平成1年～令和3年)

事業導入による効果

- ・炭酸ガス効果
熟期が早くなる傾向が見られ、収量も2割ぐらい増収したようだ。株疲れや、花蕾の発生の休みも少なく生育が良好であった。
・・・生育の状況に合わせた液肥等で肥培管理が重要となる。
- ・UV-Bライト導入効果
うどんこ病の発生については、ほとんど見られなかった。併せてダニの抑制にも効果があるようであった。
・・・導入経費がかかるので検討が必要。またイオウ燻蒸等の防除作業の労力軽減につながる。
- ・新規高設ベンチの導入等
導入に合わせ管理の徹底を支援し収量アップにつながった

その他の活動の効果

- ・個別巡回や現地検討会を生育ステージに合わせ実施
・・・個別の課題について丁寧に対応することで収量アップにつながった



現地検討会



後半
活動方法

技術実証（確認・調査）

技術普及

部会活動

講習会・検討会など

並行して

個別対応

組織活動活性化

他地区(角田市,丸森町等) いちご、他品目トマトなどへ波及させていく

できるだけ
1億円に近づきたい

目標

JA共販額 67百万円(H30現状) →75百万円(R1) →85百万円(R2) →1億円(R3年)